

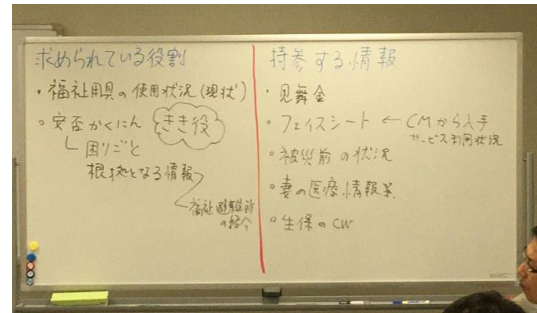


2月16日(日)広島県社会福祉会館にて西支部全体会・研修会を行いました。参加者は25名(全体会参加者18名、研修会参加者21名(うち実習生2名含む))でした。

全体会では、2019年度の西支部活動の振り返り、2020年度の事業計画(案)、当初予算(案)について話し合われました。

引き続いて行われた、研修会は、災

害被災者支援委員との共同開催で『社会福祉士による支援活動の実際～積極的ニーズ把握・アセスメント～』と題し、講師に会員の平岡和子氏をお招きして開催しました。講義の流れとして、①ソーシャルワーカーによる災害支援とは②災害対応ガイドライン・マニュアルの理解③社会福祉士による支援活動の実際④被災地で行う積極的ニーズ把握⑤事例を使った演習の順に研修は進んでいきました。平岡氏から『災害時の支援は、マイクロ段階(個別支援)からマクロ段階(行政機関との調整まで含めた地域支援)まで幅広い事、被災地域の支援者が主体であり、その応援を行う後方支援(自己完結型の活動であり被災地域に負担をかけない自立した活動を行う)であり、3つのS(support(名脇役であれ)、share(情報共有と連携)、self-sufficiency(自己完結型の活動)が重要である』という事を学ばせて頂きました。研修を受けた方からは「災害支援からはボランティア活動(後片付け等)しか思い浮かばなかった。社会福祉士は(災害支援の中で)何をするのか具体的に解りました。」や「限られた時間の中で情報を集め、次の支援につなげていくためには、支援に



入る前の準備や心構えが大切だと思った。」という感想が聞かれました。まず、被災者の訪問準備段階では、被災前の基本情報(本人家族の了解を取って)、弁護士会や社会福祉士会のニュース等、自治体の被災対策本部が定期的に発行している「避難所への情報提供」、尋ねるお宅の住宅地図、被災支援アセスメントシートを準備する。次に、面接時の対応ではバイスティックの7原則(相手のベースに合わせ、相槌、

質問、感情の受け止め、理解、共感、傾聴など)で聞き役に徹する事。説明・提案・同

意を取り付けるためには、訪問前に予測を立てて、現地地域包括職員と説明や提案の方向性をすり合わせておく必要がある。被災者が被災者家族の介護するなど生活困窮の中での苦勞に対しての勞いも忘れてはいけないなど、事例を基にグループワークや解説を通して災害支援の現場での実践を垣間見る事ができました。